慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	著者リプライ
Sub Title	
Author	鈴木, 智之(Suzuki, Tomoyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2017
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.22 (2017. 7) ,p.179- 180
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のページにタイトル未記載
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20170701-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

著者リプライ

鈴木　智之

評者（松下さん）から求められた課題を私なりに受け止め直してみます。問われているのは、「あなたは文学作品に現れる顔、あるいはその不在の形象を、社会的リアリティの変容に関わる何らかの“徴候”として読んでいるつもりのようだが、その知識社会学的命題の正当性をどのような理論構成や方法論的手続きの上に主張するつもりなのか（ごまかさずに、きちんと言語化せよ！）」ということだと思います。本書を「社会学」の研究書と言いうるかどうか、いささか心もとないものがあります（というより、さすがにそれは無理です）が、それでもこの先にそのような問いが立ち上がってしまうのは避けがたいことですので、この場を借りて少し言葉にしてみます。

この本で私は、「顔がない人間」や「顔を奪われた人間」を描くことで小説のテクストは何を伝えようとしているのか、について考えました。その考察がうながされたのは、この「顔のない人間」の姿が、何らかの「危機」を暗示するしるしであると感受されたからです。とすると、ここで問われているのは、“徴候”として現れるもの、つまり何かしらの隠れた現力の影響を予想（予感）させる出来事や形象を、その“隠れた原因”に結びつけながら“読み解く”という行為が、社会学という学の内部で成り立ちうるかどうか、にあるでしょう。これに対する答えは、「社会学」という学（制度）を構成する規範をどのように設定するのかに関わると同時に、（これと深く結びつきながら）「現象」とその「原因（規定力）」の関係をどのように想定するのかに応じて変わってきます。本書は一貫した方法論的手順に従って書かれたものではありませんが、松下さんが指摘してくれたように、かなりの部分において、P・マシュレーが『文学生産の理論』において示した考え方に依拠しています。その背後には、言うまでもなく、L・アルチュセールの「徴候的読解」や「構造的因果性」という視点があります。

私なりにかみ砕いてみると、テクストを「徴候的に読む」とは、語られたもの（言説）の下に語られていないもの（沈黙）の作用を見通し、その語られざるものの効果とともに言説の全体を「再建」しようとする作業です。アルチュセールによれば、「沈黙の言説」は「語られた言説」の中に、「厳密さの欠陥」や「空白」を呼び起こしつつ現れてくるものです。この発想を「文学」の読解に応用して、作品（テクスト）上に浮上する欠損、矛盾、歪み、あるいは不可解な形象を手がかりとして、その出現をもたらした沈黙の領域――マシュレーは「テクストの無意識」と言っています――を再構成していくような読み方が可能になるでしょう。この時、言説の表面に現れるものは、その背後にある「構造」あるいは「矛盾」の結果として位置づけられますが、その原因は言説の中にのみ姿を見せるのであって、背後に回り込んでみても実体的に見いだすことはできないのだと、アルチュセールは言います。見えない原因が、目に見える形

鈴木智之「著者リプライ」
『三田社会学』第 22 号（2017 年 7 月）179-180 頁

で引き起こした結果。それを起点として、かつそれを包摂しつつ、その出現の了解を可能にするような読みを施すこと。ここに、ひとつの「方法」が設定されます（そう考えると、本書での主な作業はやはり、「文学からの社会学」とは基本的スタンスが違うように思えます）。

このような視点に立つとすれば、目指されるべきは、「メディア環境の変化が対面的コミュニケーションを困難にしている」というような技術決定論的な因果関係の特定ではなく、なにがしかの技術の作動とともに「顔のない人間」の形象を浮上させる「構造」の記述だということになるでしょう。もちろん、本書はとてもそのような大それた課題に挑んでいるわけではありません。しかし、もしそのような地点にまでたどりつければ、私も『顔の剥奪』を社会学的探究の一部分であると主張できるような気がします。

ともあれ、現象は目に見えるもの（直接に観察可能なもの）の相互関係だけで出来上がっているわけではなく、その関係を条件づける沈黙――目に見えないもの――とともに成立している、というのが基本的な出発点です。目に見える「奇妙な現象」は、この暗部に隠し込まれたものを読み通すための手がかりです（そうした「徴候」の現れる場所として、「文学」が特権的な位置を占めるわけではないことは言うまでもありません）。そう考えると、松下さんが投げかけたもうひとつの問いに対しても、回答の道筋が見えてくるように思います。何人かの研究者が、偶然にも同時期に、「顔」を主題とする本を書いたことをどう考えるか。これもまた、隠された何かを暗示する「しるし」――その意味での、必然性を有する現象――なのかもしれません。「顔」という奇妙な場所をめぐって、言説の投入を要求するような「密かな構造的条件」。いったいそれがどんなものなのかについては、社会学者のふりをして、引き続き考えてみたいと思います。

（すずき　ともゆき　法政大学社会学部）